はんのう お宝スポット
HANNO Treasure Spot Information.
VOL. 11
発行：飯能市教育委員会教育部生涯学習課（文化財担当）　〒357-8501　飯能市大字双柳1-1　Tel (042)973-2111
第11号　平成28年3月31日発行　　平成18年3月31日創刊

「双盤念仏」をごぞんじですか？

●第11号の特集は「飯能市の双盤念仏」

今回は、飯能市内に伝わる民俗芸能「双盤念仏」を取り上げます。お囃子や獅子舞はごぞんじの方でも「双盤念仏」となると…。それもそのはず、県内で今でも実際に演奏されている所は数えるほどですから。

そんな貴重な芸能が、飯能市には今も脈々と伝わっています。

特集「飯能市の双盤念仏」

飯能市の双盤念仏

飯能市文化財保護審議委員会委員
小野寺 節子

1 はじめに

「双盤念仏」とは、どんなものなのでしょうか。

まずは「ナァーア　ムーウウーー」などと、声を出してみましょう。どんな調子でどんな声を出したらよいのか、なかなか見当もつきませんね。念仏の文言「南無阿弥陀仏」を引き延ばし、とくに母音をはっきりと発音しながら声を出します。これは引声という唱え方で、「引声念仏」といいます。念仏は、一人の唱えに合わせたり、皆が同時に唱えたりしますが、何人かで順に唱え、合唱のように合わせていく唱え方も出てきました。しかも、大太鼓や鉦を叩いたり合わせたりしながら唱えるようにもなりました。多くの場合、太鼓は、胴長の太鼓で、打面の前から２本のバチで打ち込み、鉦は、鳥居型の枠に、底を平らにした大きなフライパンのような鉦を吊るし、打つ人とＴ字形になるよう置き、その鉦の裏底を撞木というバチ１本で打ち込みます。その音や響きは実に大きくて、思わず耳を覆いたくなるような具合です。

落合西光寺双盤念仏

これらの唱えや響きは、地域の五穀豊穣や悪疫退散を願い、家々の安全や繁栄を願い、地域の人々によって行われてきました。

こうした唱え方がどのように発生し、飯能市域に伝わって来たのか、はっきりとしない部分もありますが、念仏を唱えることで救われるという教えが広がるとともに、信仰心に芸能性が加わりながら、京都や鎌倉などで発達した唱え方が、近世に入る頃から関東地方にも広く伝わり、神奈川県、東京都、埼玉県などに伝えられていたことがわかります。江戸東京の地域では、多摩川沿岸、浅草寺などからの伝播の系譜がみられ、埼玉県内では、所沢市、狭山市、入間市、飯能市、日高市など県西部に伝

えられています。

それぞれの地域では、地元の信仰行事と密接に関わったり、参詣する人々を楽しませる工夫を重ねたり、あるいは念仏講中（唱える人々の組）同士で、技の教え合いや競い合いをすることもあったといいます。

2 飯能市の双盤念仏 飯能市では、落合の西光寺薬師堂、川寺の大光寺虚空蔵堂、川崎の普門寺観音堂などのほか、矢颪の浄心寺、双柳の秀常寺、平松の円泉寺などでも双盤念仏が奉納されたり、行われたりしていました。飯能市域には、江戸時代の後半頃に伝わったと考えられ、浅草流といわれる系統が３か所で行われていましたが、唱える人々や奉納の機会の消滅、鉦自体が戦時中に供出されたことなどから、存続できなくなった所が大半です。

3 落合の双盤念仏 そうした中で、地元の熱意や努力で現在でも行われているのが、落合西光寺薬師堂の双盤念仏です。戦後の中断期を経て、昭和60年に「西光寺浅草流双盤念仏保存会」が結成され、今に至っています。双盤念仏は、西光寺の元旦祈祷祭・盂蘭盆会大施食会（８月14日、お施餓鬼）ではお寺の本堂で、落合薬師堂の春（４月12日）と秋（10月12日）の例祭では、お堂の中で奉納されています。「落合の薬師様（薬師如来像）」は、天正18年（1590）に、小田原北条氏に関わる滝山城（八王子市）より、移されたといわれています。目の病に効能があるといわれ、目の絵馬がたくさん掛けられています。

では、実際にどのように唱えるのか、見てみましょう。お堂の本尊前に太鼓（大親）が座し、その後ろに、本尊に向って左側から、一番鉦（親鉦）、二番鉦、三番鉦、四番鉦（尻鉦）が正座します。皆が揃うと「一礼」し、「十三鉦」「念仏（四へん返し、五へん返し）」「掛け念仏」「せめ込み」「玉入れ」「大山越し」「竜頭（たつがしら）」「小山越し」「天地の玉」「十三鉦」と続き「拝礼」して終ると加藤奕雄氏が著わした『浅草流落合薬師尊伝承双盤念佛口伝』（昭和52年）には、順番や演奏方法が記されています。演奏は、太鼓のあと、一番鉦から四番鉦が順に行っていき、「念仏」では各鉦が引声と打音を入れ、「掛け念仏」では太鼓と各鉦が交互に入れていきます。「せめ込み」では全員が速度を速めたり整えたりしながら、唱えていきます。「玉入れ」はハイライトの一つで、互いの息が合わないとうまく聞こえません。その後は、大きい音から小音にしていったり、打音を一致させたりして、締めくくりとなります。一回の奉納は、全体が大きなストーリーになっているのがよくわかります。

保存会の方々の話では、月に３回ほど集まって練習をしているといいます。基本的な唱え方と打ち方を覚え、まず尻鉦から加わっていくといい、太鼓は全体のリーダーであり、指揮者でもあるといいます。タイミングや速度を合わせるために、近年はメトロノームなども利用していると聞きました。メトロノームに合わせながら、懸命に練習している様子は、頼もしくもほほえましくも思えます。

4 おわりに 薬師様の春と秋の例祭は、山里のお堂前に地域の人々が集い、読経や念仏、本尊のお参り、茶菓を楽しみ、抽選会の品物を頂いて過ごす穏やかな一日です。伝統を伝える努力と地域を思う姿は、鉦の音とともに「市民のお宝」ではないでしょうか。

お施餓鬼での演奏

特集「飯能市の双盤念仏」インタビュー「人生が音に出る ―双盤念仏を受け継ぐ―」

「落合西光寺双盤念仏（落合の双盤念仏）」は、市内落合で現在も演奏されている双盤念仏です。一時は中断に追い込まれながらも、関係者の熱意により復活を果たしています。ただ、他の民俗芸能と同じように、後世への継承に苦慮しています。落合の双盤念仏の伝承団体である西光寺浅草流双盤念仏保存会では、平成27年度に文化庁からの補助金を受けて、後世への継承に役立つ映像記録の作成に取り組んでいます。

そこで同保存会の小島正義会長、小嶋一相談役から演奏時の聴き所や映像記録作成についてなど、いろいろとお話を伺いました。

※読みやすさを考慮してお二人の話を再構成して掲載しています。

――まずは、現在の会員数と年齢構成について教えてください。

現在の会員数は約10名です。年齢構成は50～70歳代で全員男性です。女性が参加してはならないということはないのですが、昔は家の跡継ぎのみに口伝で教えていた名残があるのかもしれません。もちろん今は跡継ぎ息子以外でも参加できます。

――途絶えてしまったものを復活なさっていますが、どのような経緯によるものでしょうか。

戦争による金属供出により、一度は途絶えてしまいました。昭和50年ごろのことですが、鉦を叩ける人が80歳代となり、このままでは知らない人ばかりになってしまうという危機感から有志が集まって練習をはじめ、昭和52年に復活に至りました。また、当時の西光寺のご住職が熱心に働きかけたことも大きなきっかけの一つです。

――復活の際にはご苦労も多かったのでは。

当時は太鼓を叩ける人が既にいなかったため、川寺の双盤念仏の方からご指導を頂きました。ただ、落合のものとは全く同じではなかったため、記憶を頼りに少しずつ昔の形に修正していきました。また、口伝により伝承していましたので、人により鉦も叩き方が若干異なっていました。たまたまメモを残していた人がいたため、そのメモを基に演奏方法を統一するなどして現在の形に整えていきました。

――用具などはどうされたのですか。

供出してしまったため、新たに購入するまで鉦がありませんでした。そのため代用品として、当時は牛を飼っている家がありましたから牛乳缶の蓋や鍋を使ったり、鉄板を円形に切ったもので鉦を自作したりして練習していました。

――演奏の聴き所を教えてください。

鉄板で自作した鉦

「せめ込み」から「玉入れ」という部分にかけてが最高に盛り上がります。「玉入れ」がきっちりできると演奏している方はもちろんですが、聞いている方も気持ちがいいと思いますよ。

――演奏で難しい所はありますか。

演奏している５人の息を合わせるのが難しいですね。４枚の鉦の音が１つの音に聞こえるのが理想ですが、呼吸が合わないとうまくいきません。そのため本番が近くなりますと、本番と同じメンバーで練習するようにしています。また、普通の歌と違って歌詞が意味のある言葉と言うよりも掛け声に近いものですから覚えるのが難しいですね。

――太鼓でも難しい所はありますか。

「せめ込み」というクライマックスの部分では「自由打ち」という演奏をします。１分間に170～180回で打っている鉦をバックに太鼓を自由に打つのです。「自由に」と言われてもいざとなると難しいものです。しかも「打つ人のカラーを出せ」と言われていますので、先輩の真似をしているだけではダメなのです。その人のオリジナルでなければなりませんので大変に厳しい部分です。

――太鼓を打つ人のセンスが問われる訳ですね。

そうですね。それに打っている人の心が太鼓には素直

に現れます。あれこれしようと考えて手と頭が一つにならないようですと必ず間が外れます。「しまった」と思って叩くと聞いている方にも伝わるものです。たとえ間違えても、とぼけて叩くのも技術ですよね(笑)。「見ている人の９割は分からない人だから安心してやれ」なんて先輩からは励まされもするのですが、やっている方としては悔しいものですよ。

――今回、記録作成という事で撮影・取材を受けられましたが普段とは異なりましたか。

普段とは違う緊張感がありました。お祭りだと一杯ひっかけてから演奏できますが、カメラの前ではそうはいきませんからね(笑)。今まで何気なくやっていたことも、改めて撮影となりますと意識しますし。後世に我々の演奏を残そうという事ですから、すごいことをしているなと改めて思いました。

――撮影時の演奏で難しかったところは。

途中からやってくださいと言われるのが難しかったですね。いつもは流れの中でリズムに乗ってやっていますので。いきなり途中から演奏しようとしても思い出せないこともありますよ(笑)。

――シンプルなだけに難しい芸能ですね。

演奏している側の息が揃うのが何よりです。太鼓がうまくいかないと鉦がつられてしまいますし、鉦が一定のリズムで叩かなければ太鼓は打ちにくいものです。お互いの息が合わないと疑心暗鬼になり、音に迷いが生じ、聞いている人には耳障りな音になります。そのため、普段からメンバーの十分な意思疎通を心掛けています。

――奥が深いですね。

やればやるほど奥が深いと感じますね。格好つけようと思うと間違えますので、何も考えず無心で演奏すると良い音が出ます。だからでしょうか、先達たちの演奏を聴いているとその人の人生が音に出ているように感じる時もありましたよ。

飯能市の双盤念仏は、江戸時代に伝わった芸能です。当時としては最先端の芸能で、人気を博しました。打楽器だけのシンプルな演奏ながら、腹の底に響く力強いリズムが当時の人々を虜にしたのでしょう。中断の苦難を味わいながらも復活した「秘話」も魅力的です。

今回の映像記録事業により落合の双盤念仏は、末永く記録として残されることになりました。でも「百聞は一見にしかず」です。ぜひ、落合のお祭りに足を運んで、生の演奏を体感してみてください。きっと「市民のお宝」であることを実感されることでしょう。

はんのう お宝スポット
HANNO Treasure Spot Information.
VOL. 12
発行：飯能市教育委員会教育部生涯学習課（文化財担当）　〒357-8501　飯能市大字双柳1-1　Tel (042)973-2111
第12号　平成29年3月31日発行　　平成18年3月31日創刊

資料から飯能の昔を見てみよう！

●第12号の特集は「歴史資料から見た飯能」です。

歴史を探るのに欠かせない手がかりが「**歴史資料**」です。歴史資料と向き合い、深く読み解くことで歴史への扉は開かれるのです。

歴史資料というと、“古文書”のような**文献資料**（ぶんけんしりょう）を真っ先に思い浮かべるかもしれませんが、そのほかにも発掘調査で得られた“出土品（遺物）”などの**考古資料**（こうこしりょう）や“風俗・習慣”といった**民俗資料**（みんぞくしりょう）のような文字に記録されていない資料もあります。

今号では文献資料と考古資料という「文字」と「モノ」の資料に着目し、それらを読み解くことで見えてくる飯能の歴史について特集します。

特集「歴史資料から見た飯能」

飯能の古文書と江戸城の燃料

飯能市文化財保護審議委員会委員
浅見　徳男

「古文書」などというと、その言葉の音律から、多くの方が「こむずかしい」と思われるでしょう。「古文書学」という学問の分野があって、歴史の資料となる古い記録で、特定の対象に意思情報などを伝えるために作成された文書という定義がされており、一般の著述や記録、日記などとは区別されております。

この定義に倣（なら）うのであれば、確かにこむずかしいことになりますが、歴史調査で収集した資料は、そのような狭義（きょうぎ）なのものでなく、先人の残した日記や記録も含めて、文字資料として扱ってきました。

これにより先人の生き方、考え方を調べ、次代への参考の礎（いしずえ）としようとするものです。

そこで、林業地である飯能地方の特色であり、資料の多い林業関係のものを「江戸城の燃料」として紹介したいと思います。

＊＊＊

徳川家康が豊臣秀吉の命を受けて、天正18年（1590）に江戸城に入ったと言います。その後、慶長11年（1606）に城の改築にかかり、ここを日本の中心として政治の本拠としました。

家康自身は駿府城（すんぷじょう）を修復してそこへ移り、二代将軍秀忠が城主となって、やがてここから全国に布令を発するようになります。ここでは政治の話から離れて、飯能と江戸城の関わりについて述べていきましょう。

江戸城の改築は三代将軍家光の時代に完成したようですが、その城内で焚く燃材を飯能地方から供給しておりました。

改築の成った城内での暖房や煮炊きの燃料を、煙の多い雑木を燃やしたのでは、城内が煤けてしまうと考えたのか、衛生上の問題でもあったのか、煙の少ない「瓜木（ウリノキ）」を使うことにしたようです。この「瓜木」とは、次のような燃材でした。

「瓜木」・一名ウリカエデという。その材は器具に供す。之を箸とすれば能く諸物の毒を消すという。又薪料中の最上とす。燃て烟なし。樹皮は製紙の糊に用ひ、樹皮及び其の葉は共に略青瓜に能く似たるを以て此名あり。花は夏日開き後種実を結び、秋に至りて熟す。恰も楓（カエデ）の実の如し。

（明治44年発行「楮樹栽培と諸紙製法」有隣堂書店　梅原寛重著）

煙の少ない燃焼効率の良い、箸や楊枝にも使える「瓜木」を城内の燃料として、武蔵山之根地方にこれを求めたようです。

＊＊＊

江戸城に入った徳川氏は、まだまつろわぬ武田や後北条の家臣が浪々している関東地方で、北の押さえに井伊、榊原、牧野などの譜代の家臣を配置し、西の防備に大久保長安を頭とする18人の代官を八王子に置き、代官所を設けてその出先機関として、飯能周辺には青梅の森下、日高の高麗本郷に陣屋を設けております。のちに飯能の中山にも陣屋が置かれたようですが、ここは資料がなく詳細はわかりません。

この陣屋を中心に、行政や争いごとの調停などが行われていましたが、高麗陣屋の資料に、年貢の徴収とは別に「瓜木」の上納が課されていた資料が見つかりました。

これによると、武蔵山之根地方307か村（多摩郡107か村、秩父郡95か村、入間郡21か村、高麗郡63か村、比企郡15か村、児玉郡６か村、合計307か村）に瓜木上納が課されていたようです。

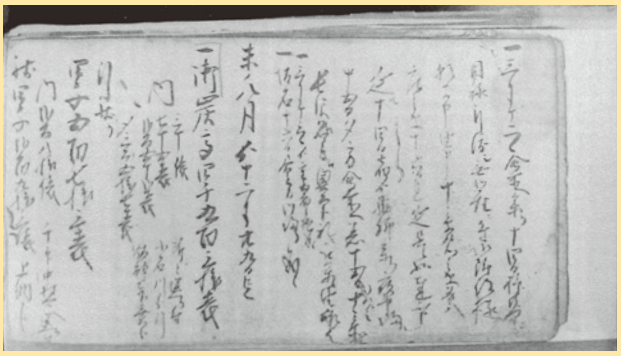
広域に亘る膨大な量の納入を、飯能の南村に住んでいた岡部兵右衛門という人が、請負人の一人として書かれており、この岡部家の資料に関連の資料が残されていました。

この記録は寛文５年（1665）から始まっていますが、享保５年（1720）になると、関東地方では伐り尽くしてしまい、今では遠州（静岡県）や秩父の奥地で調達していると書かれているものを最後に、その後は関係する資料は見つかりません。

それと共にこの時期以降、木炭の生産に関わる資料が増加してきます。想像するところ、江戸周辺の御用林（江戸幕府が領有していた山林）で生産する木炭で、江戸城の燃料は賄えるようになったからではないでしょうか。

飯能地方では名栗に御用林が３カ所あって、下名栗の有馬谷に「桂子山」、上名栗に「横倉」と「はねばみ」の３カ所、合わせて280町歩の御用林がありました。ここで生産した木炭を下名栗の「炭焼き会所」が取り仕切り、江戸の中村屋庄兵衛（神田の薪炭問屋か）を通して、江戸城へ納入していたようです。

会所の職員として働いていた東吾野の上井上に住んでいた大野惣右衛門という人が生産、流通、役人への接待などを書いた日記があり、貴重な資料として残されております。（写真はその日記の一部）



飯能地方は古来から林業地として栄えてきましたが、それに伴う資料は膨大なものになります。全体像をつかむためには、さらなる資料の収集と研究が必要ですが今後の研究を待ちたいと思っています。

秩父・多摩の林野を後背地として、飯能地方が大都市江戸（東京）へ林産物供給地として、400年ほどの歴史を刻んできました。

人々の生活態様が変わってきた今日、これからの飯能地方がどのような変化をしていくのでしょう。

飯能市指定文化財の古文書

飯能市が文化財として指定している古文書は**５点**あります。

- 長念寺寺領に関する文書
- 振武軍廻文
- 細田文書
- 須田家日記
- 旧名栗村森林組合文書

須田家日記

古代高麗郡建郡の証（あかし）―堂ノ根遺跡第1次調査出土の須恵器（すえき）・土師器（はじき）

飯能市指定文化財（考古資料 奈良時代）

飯能市教育委員会
教育部生涯学習課
文化財専門調査員
富元久美子

平成元年、飯能市大字芦苅場（あしかりば）で堂ノ根遺跡第１次調査が行われました。この調査の１号住居跡から出土した須恵器・土師器208点は、平成28年３月、一括して飯能市指定文化財に指定されました。考古資料としては初めてのことです。これらの器はなぜ、貴重なものと認定されたのでしょうか？

堂ノ根遺跡１号住居跡出土　須恵器・土師器（集合写真）

飯能市は明治時代まで「高麗郡（こま）」に属していました。高麗郡の始まりは今からちょうど1300年前の西暦716年５月に遡ります。『続日本紀』という歴史書の中に、“関東地方周辺に住んでいた高句麗人を武蔵国へ移住させて、高麗郡をつくった”と書かれているからです。「高句麗（こうくり）」とは朝鮮半島にあった国で、西暦668年に唐と新羅に攻められ滅亡してしまいましたが、戦乱を逃れて多くの人々が日本へやってきたことが知られています。高麗郡は朝鮮半島からの渡来人によって開拓された郡だったのです。

実際市内では、縄文時代の遺跡は140ヵ所も見つかっていますが、弥生・古墳時代にはほとんど遺跡が無くなり、奈良時代になって再び一気に増えることが知られています。このような遺跡数の増加現象が、古代高麗郡建郡を反映しているのではないかと考えられてきました。

しかし市内の発掘調査で朝鮮半島系の文物などが見つかることはなく、考古学で奈良時代の高麗郡建郡や渡来人の移住を証明することは難しいのではないかとも考えられてきました。

ところが平成元年、堂ノ根遺跡の奈良時代の住居跡から出土した土器によって、「高麗郡が渡来人の移住によってつくられたこと」が俄然信憑性を帯びてきました。何故でしょうか。

この住居から出土した土器の特徴をみてみましょう。

A　堂ノ根遺跡１号住居跡出土　須恵器蓋

Aは須恵器の蓋（ふた）で、Bのような坏（つき）と組み合わせて使う食器です。この須恵器の特徴は、粘土に多量の金雲母を含むことと、表面にろくろで整形した時の大きな凹凸が残っていることです。

B　堂ノ根遺跡１号住居跡出土　須恵器

C　堂ノ根遺跡１号住居跡出土
須恵器　甕破片　高台坏

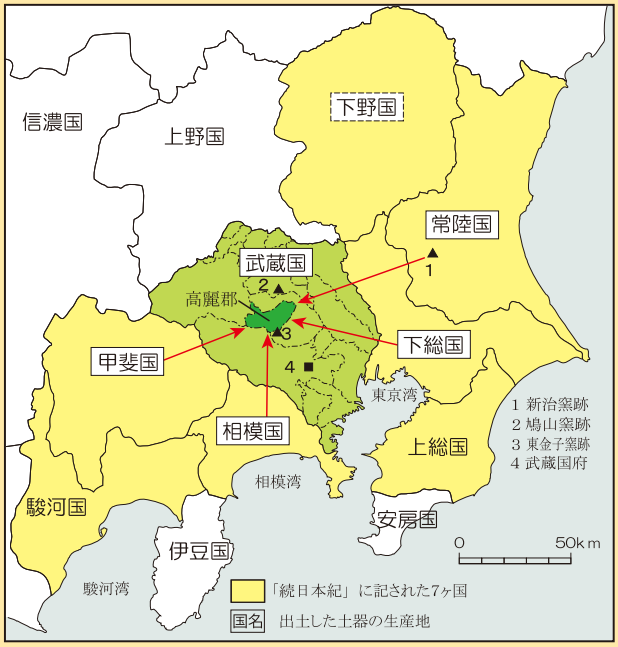
また、Bは高台のついた坏で、長石という鉱物の白い粒を多量に含む、ガサガサした粘土を使っています。

Cは須恵器甕（かめ）破片で、胎土に金雲母を含み、同心円の叩き目痕が器の外面全体に付けられています。須恵器甕は貯蔵器として使われたものです。

A・B・Cの坏・蓋・甕は、地元の南比企窯跡群（鳩山町周辺）でつくられた須恵器とはまったく違った粘土・技

法をもっています。では、堂ノ根遺跡出土の須恵器はどこでつくられたものなのでしょうか。

答えは、筑波山の東にありました。粘土に金雲母を含み外面に叩き目痕を付ける技法は、茨城県土浦市周辺の新治窯跡群でつくられた須恵器の技法と一致しています。実は『続日本紀』の中に挙げられた、渡来人の移住元である関東周辺七ヶ国の中には、常陸国（現在の茨城県）が含まれています。



高麗郡に移住した人々が住んでいた関東周辺七ヶ国

また、Dの土師器甕は煮炊きに使われたものですが、「常総型甕」と呼ばれ、今の茨城県から千葉県北部に流通していたことが知られています。

したがって、堂ノ根遺跡１号住居跡からは、常陸国（茨城県）でつくられた食器・炊飯器・貯蔵器がセットで出土したことになります。飯能周辺の川越市や所沢市、坂戸市などでは奈良時代の多くの集落が発掘調査されていますが、常陸国の土器がセットとして出土した例はありません。このような出土状況は、堂ノ根遺跡の須恵器・土師器は交易で得られたものではなく、生活に必要な道具一式を持参して、常陸国から人が移住して来たことを示しています。さらに、一緒に出土したＥの土師器の坏は700年代の初頭に地元で生産されたものです。これによって１号住居跡が、西暦716年に極めて近い時期

D　堂ノ根遺跡１号住居跡出土　土師器　甕

E　堂ノ根遺跡１号住居跡出土　土師器　坏

の住居であることもわかりました。

このように、堂ノ根遺跡１号住居跡から出土した須恵器や土師器によって、『続日本紀』に書かれていた“西暦716年、関東周辺七ヶ国からの移動”が本当にあったことが証明されました。

また、１号住居跡が縦横約７mという大型住居であること、出土した須恵器が珍しい蓋付の有台坏であること、生活道具一式を持参していることなどから、居住者が裕福な支配階層であった可能性もあります。

飯能市内の遺跡数は弥生・古墳時代に激減した後、８世紀に入って飛躍的な増加に転じています。また、武蔵国国分寺や国府に須恵器や瓦を供給した東金子窯跡群は、高麗郡に移住してきた渡来人の工人と密接な関係があるのではないかと指摘されています。

古代高麗郡の設置は飯能市域の開拓に大きく寄与し、その後の中世・近世への発展へつながる基礎を築きました。堂ノ根遺跡第１次調査１号住居跡出土資料は、飯能市の古代史を明らかにする上で貴重な資料といえます。

（※土器の個別写真は、飯能市郷土館提供）

はんのう お宝スポット
HANNO Treasure Spot Information.
Vol. 13
発行：飯能市教育委員会生涯学習スポーツ部生涯学習課（文化財担当）　〒357-8501　飯能市双柳1-1　Tel(042)973-2111
第13号　平成30年3月31日発行　　平成18年3月31日創刊

今と昔の木の使い方を見てみよう！

●第13号の特集は「木材利用のいま・むかし」

飯能市は市域の約70%が森林という、緑が豊かなまちです。

現在、多くの森林はスギやヒノキが植林され、建築用材として育てられています。

江戸から見て西の方から運ばれてくるので「西川材」と呼ばれるようになった材木も、植林が行われる以前は雑木林として、建築用材だけでなく、薪や炭の材料として利用されてきました。

今号では、縄文時代や平安時代の人々が木材と関わってきた証拠である遺物や遺構から見る昔の木の利用と、植林し主に建築材として使用されるようになった森林についての歴史と現在の木の利用について特集します。

特集「木材利用のいま・むかし」 1

木の香・せせらぎの町

飯能市文化財保護審議委員会 委員
岡部 知子

私の住いは「名栗川」上流近くにあり、県道70号線が渓流を何度もクロスした山林と清流の小集落に暮らしています。家業が「材木店」ということもあり、私の朝は「木の香」で目覚め「せせらぎ」で就寝の人生だと思っています。育成した原木が製品となるまでの時間は私の一生より長く、人も森林も助け合いながら「共存」を絆に世代を重ねる構図に生かされていると考えますが、今日に至る自然変貌は大きくスローな毎日を生きていると思っている私の錯覚なのではと思ってしまうのです。随分と便利になった生活様式の分量だけこの自然環境は変化しています（しかも地球規模で…）。この現実は私自身も世間の誰もが知っていることであり、子供たちも学校で習い知っているのです。が、進む環境破壊に私たちは成す術もなく明日を生きようとしているのでしょうか…。

＊＊＊

木材の需要により飯能を含む近隣地区の繁栄は江戸時代からであったと記されています。江戸で起こった度重なる災害による民家の修復建造に必要な復興材としての需要が増えるにつれ「木材」の搬送効率を上げる必要があったのです。そのための重要な手段として「川」が利用されるようになり「名栗川（入間川）」から木材を江戸まで流送する「筏」が生まれました。

飯能河原上流での筏流し（再現）

渓谷を巧みにあやつる「筏師」は花形でした。秩父山地から比較的ゆるやかに下った丘陵地にある飯

能地域の山地には「杉」・「ヒノキ」だけでなく雑木林に多種の広葉樹が生育していました。しかし、江戸の中期になると需要があまりにも増え、危機感を先取りした山主たち（西川林業）は自然林の伐採を止め、計画的な植林による育成林へと移行したのです。植林と言っても先の長い話…。その間は間伐・枝打ち等、手間暇をかけて育成作業を続け、その間のしのぎとして薪炭生産での山林経営へと舵を切りこれが主産品となり定着したのです。この仕事は明治の中期まで続いていました。その後明治の後期からは「杉・ヒノキ」の苗木生産が活発化するにつれ「西川材」として順調に発展を遂げていったのですが、第2次世界大戦が勃発してから以降、戦火が増すごとに軍需品としての木材供出に追われることとなったのです。その膨大な量の供出はまさに乱伐状態で、山は枯渇してしまったのです。やがて終戦となり日本政府は住宅復興へと急進しました。しかし、政府の方針は戸建よりも木造集合住宅を優先させたのです。戦災を受ける前の宅地は分散していましたが、それを集合住宅型にすることにより居住を集約。その区画整理計画は戦後復興を考えた日本政府の都市構想であったと思うのです。戸建であろうと集合型であろうと「西川材」の需要は勢いを取り戻し、経済的にも安定したその頃すでに計画植林が実行されていたのです。日常誰もが目にしている山林風景、それは植林された当時の「杉・ヒノキ」が成育した「西川材」の豊かな自然環境の今現在なのです。

大正時代になると「木材」の搬送体系が大きく変わりました。武蔵野鉄道（現西武鉄道）の開通は、飯能の経済的効果、人々の日常生活をも変化させました。

山積みされた公用材木（飯能駅前）

駅の界隈には多くの「材木店」が集まり、多種多様な業種で賑わう「町」の繁栄がありました。花形「筏師」の時代にも「筏宿」で賑わいましたが「鉄道」開通による賑わいは別格でした。世情はまさに「大正ロマン」を背景に沸いていたのです。建築物についても「文明開化」の流れを汲んだ大正建築は今尚、各地に存在しています。デザイン上は「煉瓦」のイメージがありますが、洋風建築に影響を受けながらも「伝統日本建築」を基に有能な建築士の「材木」の使い方「和」の技術が支えていたのです。過去に相当数の「文化財指定日本家屋」・「町並み保存地区」を見学して来ました。専門知識に乏しい私は決まってその家屋の空気を感じるというか、世代を超え支え続けてきた「木と人間」の残り香に感動しています。そして伝統技術を残した「職人」の技術が美しいと感じる極上の時間に安堵しているのです。

立木の伐採は秋の半ば過ぎから始まります。昔（大正時代）は切り倒した木は輪組みと呼ばれる山の斜面に積み重ね、約1か月の乾燥後に修羅出しという方法で急坂を下るのですが、とても危険な作業であったため昭和30年代には消滅しました。

輪組み

修羅出し

現在ではユンボやクレーンなどの作業車両による搬出が主流となっていますが、その他架線と呼ばれるワイヤーロープ方式、まれにヘリコプターで移送するところもあります。下ろされた木材はトラックへと積み込まれ「市場」へ集荷されます。木材の取引は、山主が木材を「売りたい」という意向を示すか材木店が「買いたい」という意思をもって「木材市場」でセリを行います。購入した「材木店」は柱や板へ加工して製品化するのです。基本的にはこの関係で取引は成立していきますが、

「売り手」と「買い手」の関係は、世の中の取引と同様に複雑な面もあります。特に、近代においては「外国産材」流入による大問題については周知の通り。「シックハウス」問題についても現在進行形、すべて解決…とは言えない現状(これも周知)なのです。私たち「木」に関係する業者仲間は笑顔で耐えているのです。全国各地に納品されている「西川材」の品質評価その物が唯一の希望とも言えます。一級品の材木で知られる関西の産地からの「西川材」への信頼度は想像以上に高く、輸送経費をかけてでも依頼が来ています。長い冷え込みに耐える私たちにとっては感謝しながらジッと次のオーダーを待っているのです。

今日を考えるとき、私たち「おとな」は耐える…という戦いをしていますが、小・中学生のみなさん！どうぞ「山」を散策してください。「川」のせせらぎを聞いてください。

そして…いっぱい「自由な夢」を描いてください。

2

特集「木材利用のいま・むかし」

考古資料から見た木材の使用について

生涯学習課文化財専門調査員
片岸 絵梨花

1 **はじめに** 今も昔も自然豊かな飯能市では、太古の昔からずっとその自然を利用した生活を送っていました。木材の入手も容易(たやす)く様々な用途で、人々に使われてきました。

残念ながら飯能市では考古資料として木材が現在まで残っている例はありません。植物性の材料は大抵腐ってしまって残ることは稀だからです。しかし、木材そのものが残っていなくても、遺構や遺物から木材を使用していた痕跡をうかがうことは出来ます。これからいくつか紹介していきましょう。

2 **縄文時代の木材の使用**

1）狩猟に使われた木材

双柳地区にある山ノ内遺跡第３次調査では、楕円形の大きな土坑が写真１の様に並んで発見されました。土坑の特徴は２～３m程の長さで、土坑の断面を見るとV字型に深く掘り下げています。このような穴は、狩猟に使う落とし穴と考えられています。

1（山ノ内遺跡３次調査　赤枠：落とし穴）

さて、山ノ内遺跡の別の地点で見つかった落とし穴の底には、写真１の落とし穴とは違い小さな穴が２つ掘られていました（写真２）。当時、木の枝が立てられていたと考えられています。穴に落ちた動物の足を地面につかなくし、逃げ出すことが出来ないようにして、生きたまま捕らえるための仕掛けと想定されています。このように木そのものが残っていなくても遺構から木材が使用されていたことが分かります。

2（山ノ内遺跡で発見された落とし穴）

2）道具の一部に使われた木材

最初に述べたように、木材は時間がたつと腐ってしまうため、発掘調査で出土するのは土器や石などでできたものが中心になります。縄文時代の遺跡からは「石斧」と呼ばれる石器が非常に多く発見されます。

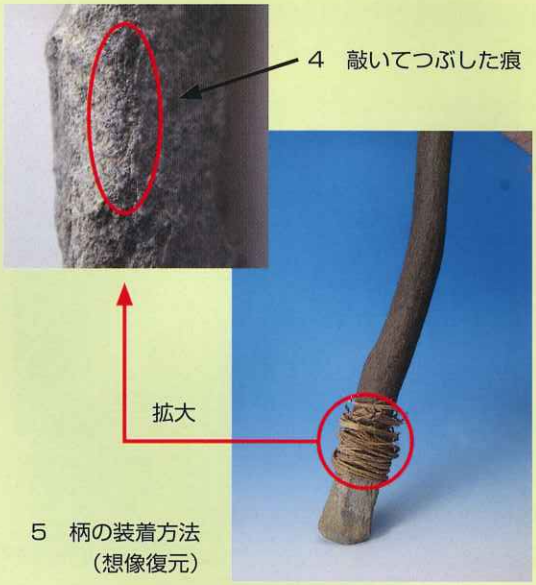
この石器がどのような使われ方をしていたか、飯能市で出土した石斧から観察していきたいと思います。

3（飯能市で出土した石斧　左：打製　右：磨製）

縄文時代には、打製石斧と磨製石斧、２種類の石斧があります。今回は写真３の左側にある打製石斧を取り上げてどのように木材が利用されていたのか観察してみましょう。

打製石斧とは、石を打ち割って斧のように形を整えた石器です。石を割った際できたするどい割れ口は刃として使われていたと考えられますが、写真4の様に側面の割れ口はわざと敲（たた）いてつぶしています。つぶして一部を窪めるように加工することで、柄と固定しやすいように工夫していました。柄は木材を使用し、縄でくくり付けて使用していたと考えることができます。（写真５）

「石斧」という名前がつけられていますが、使用方法は現代のスコップと同じで、土を掘るのに使用しました。



5　柄の装着方法
（想像復元）

③ 奈良・平安時代の木材の使用

張摩久保（はりまくぼ）遺跡は、奈良・平安時代の遺跡で、古代の人々が住んでいた住居跡や掘立柱（ほったてばしら）建物跡が見つかっています。

6（張摩久保遺跡　４次調査　一号掘立柱建物跡）

第４次調査からは、市内で最大級の掘立柱建物跡が発見され、古代の役所跡と考えられています。柱を据えるための穴を観察してみると、建物に使用された柱の跡が綺麗に残っています。

7（1号掘立柱建物跡の覆土）

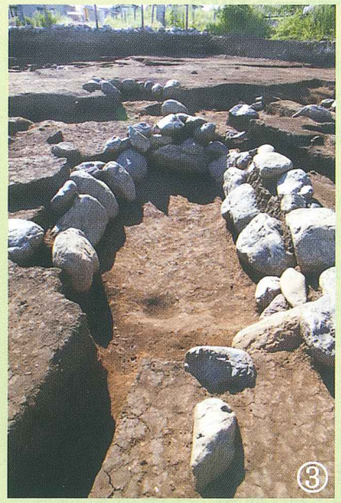
写真7の黒い部分は柱の木がそのまま腐って埋まった痕跡です。この穴の痕跡から直径20～25cmくらいの木材（柱）を使用していたことがうかがえ、建築部材として木が多く使用されていたことが分かります。

また、丸太を加工する際に使う手斧ややりがんな等の現代の大工道具に通じる鉄製品も出土しています。

④ おわりに

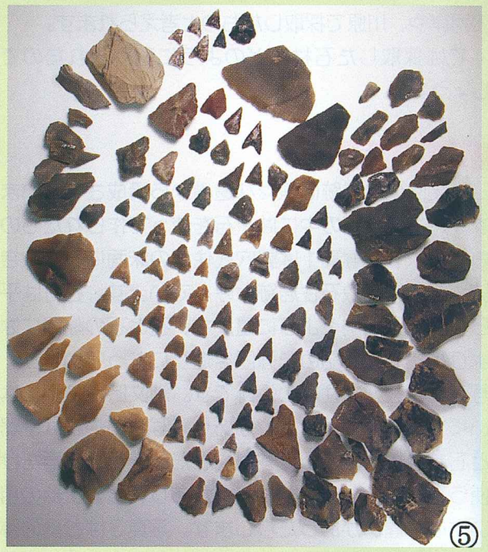
今回は飯能市で発見された遺跡や遺物からわかる木材の使用例をいくつかあげて紹介してきました。昔から人々にとって木材は一番手に入りやすい材料だったのは一目瞭然です。

使用方法は様々で、道具の一部に木材を使用したり、張摩久保遺跡で発見された掘立柱建物のように柱などの建築資材として使用したり、またその他にも土器を焼く際の燃料材などにも使われていました。限られた資源のなかで上手く木材を使用し、大昔の人々にとって大事な生活資源だったことが分かります。



写真①
柄鏡形敷石住居跡（加能里遺跡第47次調査）
写真②
竪穴式住居跡の石囲埋甕炉跡（別所平遺跡第2次調査）
写真③
配石土坑墓（加能里遺跡第52次調査）
写真④
集石土坑（芦苅場遺跡第4次調査）

チャートと黒曜石は、素材となる石器を共有していますが、飯能市内の遺跡においては圧倒的にチャートの比率が高くなっています。黒曜石は産地が限られていることもありますが、身近に遺構や石器の材料となる資源が存在していたことは、住みやすさに繋がっていたのではないかと思います。



イノシシ形土製品

写真⑤
小岩井渡場遺跡出土のチャート製石器、剥片
写真⑥
市内採集のチャート製石器。「異形石器」は幅3.5cm

はんのう お宝スポット
HANNO Treasure Spot Information.
Vol. 14
発行：飯能市教育委員会生涯学習スポーツ部生涯学習課（文化財担当）　〒357-8501　飯能市双柳1-1　Tel(042)973-2111
第14号　平成31年3月31日発行　　平成18年3月31日創刊

「チャート」から飯能を知ろう！

●第14号の特集は「チャートの形成と利用」です。

飯能市の西側に広がる秩父山地は、中古生界の硬い岩石からなり、その一部は「チャート」と呼ぶ岩石でできています。

今号では、チャートはどこでどのようにできあがり、それが今どのような姿で目にすることができるのか、市内をハイキングしている気分でご案内いたします。

また、このチャートは昔から人々に利用されてきました。

今回は縄文時代に焦点をあてて、当時の人々がどのようにチャートを入手して、加工し、使用していたのかその一端をご紹介します。

飯能市の地形地質とチャートの形成

大東文化大学教職課程センター・関東平野西縁丘陵団体グループ　久津間文隆

皆さんのご家庭ではどんな漬物石を使っているでしょうか。かつて県内の地学教員が中心となって行った漬物石調査の結果をみると、飯能では入間川のチャートと砂岩の石が利用されています。

川原の石　漬物石を拾ってきた入間川で川原の石を調べてみましょう。飯能河原にかかる割岩橋の下には、とてもきれいな川原が広がっていて、川原の石調べには最適です。ここには、砂岩、チャート、泥岩、石灰岩、緑色岩などのれきがみられます。表面が少しなめらかで、見るからに硬そう、曇りガラスのような光沢のある石がチャートです。割るとごつごつ、色は白、灰、緑、赤茶など様々ですが、多いのは灰色のものです（図1）。

図1

川原の石のなかでチャートは全体の45%ほどです。飯能河原の石は、上流の山々から運ばれてきたものですから、チャートは上流の山地に広く分布していることが推定できます。

チャートの地形　では、チャートに会いに行ってみましょう。飯能市民の憩いの山、天覧山です。能仁寺の脇から登山道に入り、中段を過ぎると上りが急になります。左へ行くと十六羅漢像が鎮座する岩壁が現れます。これがチャートです。さらに、表面がすべすべして真っ平らな垂直の岩壁、これは鏡肌といって断層によってできたものです（図2）。ゴツゴツの岩場を登りきると標高197mの山頂、板を重ねたような層状チャートが露出しています。さらに多峯主山、

図2

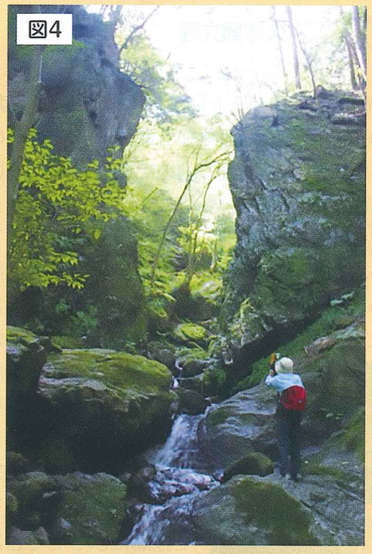
御岳八幡神社が鎮座する巨石、子の権現本堂裏の奥院、伊豆ヶ岳の男坂の鎖場、これらは全部チャートでできた頂きです。硬いチャートは侵食に強いため、このように突出した山をつくってきました。

次にチャートが広く分布している名栗湖から棒の嶺に行きましょう。まず、名栗湖の堰堤では、灰色、緑色、赤茶色などの縞々の石が敷きつめられています（図３）。

図3

これが層状チャートです。名栗湖周辺の山々をつくっていた色々なチャートがいっぺんに見られる、ここはまさにチャートの見本園です。

図4



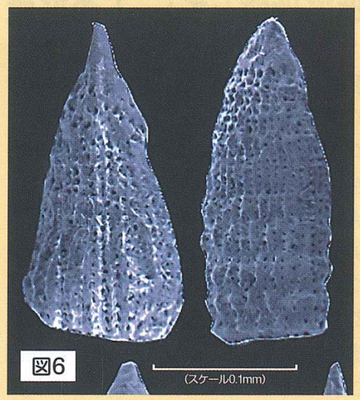
名栗湖から白谷沢登山道を通って山頂をめざしましょう。沢沿いの道をすすむこと30分、突然景色が変わり、両側がごつごつした岩の屏風になった深い谷が現れます。このような谷をゴルジュといいます（図４）。硬いチャートは侵食に強く、断層に沿って比較的弱い部分が水流によって侵食され形成されたのでしょう。尾根筋にある岩茸石も硬いチャートの岩塊が取り残されたものです。

チャートの形成　上名栗小殿の入間川の川原のチャートをうすくスライスして顕微鏡で観察してみると、0.1mmほどの大きさの白くて丸い粒々がたくさん見られます（図５）。これは放散虫とよばれるプランクトンの仲間の化石です。

図5

放散虫はガラスと同じケイ酸質のかたい殻をもっています。陸からの砂泥が供給されない大陸から遠く離れた海洋の深い海底にこの殻が堆積してできた岩石がチャートです。飯能のチャートは古生代ペルム紀～中生代三畳紀・ジュラ紀（およそ３億～２億年前）の年代を示します。写真の放散虫化石は、上名栗柏木入で採取したチャートにともなう珪質泥岩から産出したものです。およそ２億年前、中生代ジュラ紀はじめの頃の化石です（図６）。

図6



なぜ、大陸から遠く離れた海洋底でできたチャートが、大陸の縁にある日本列島の山々をつくっているのでしょうか。ペルム紀以後の海洋底に堆積したチャートは、ゆっくりと大陸にむかって移動してきて、ジュラ紀には石灰岩、緑色岩や砂岩と合体、その後、海底から隆起して現在の飯能の山々となりました。

チャートは、酸にも風化にも強くて、漬物石には最適です。さて、２億年の重みでつけたタクアンの味はいかがですか。

写真提供：目良恂氏（図5）、松岡喜久次氏（図6）
漬物石しらべ：「みんなの地学」埼玉新聞社1980　参照

縄文時代のチャート利用

飯能市教育委員会生涯学習スポーツ部生涯学習課主事補
鎌田　翔

今から約3000～１万６千年前の日本では、狩猟採集生活を核とする文化が広がっていました。縄文時代と呼ばれるこの時代は、現代と比べはるかに人と自然の距離が近く、身の回りの自然に高度に適応した暮らしを営んでいました。

飯能市内では縄文時代の初めから終わりまで通して、人々の生活の跡が見つかっています。今回のお宝スポットでは、飯能市内における縄文人の活動の一例として石材の利用、特に「チャート」の利用に着目します。

採取

まずはチャートを手に入れなければなりません。縄文時代の人々はどこから調達していたのでしょうか。飯能市の山地には秩父帯と呼ばれる砂岩・泥岩・石灰岩、そしてチャートなどで構成された地盤が存在します。天覧山などではチャートが露出しているのが見られますが、このような露出から直接採掘したような証拠は今の所見つかっていません。遺跡において主に見つかるチャートは、角が取れ、河川等による運搬作用を受けた状態であることから、原産地から自然に運ばれてきたものを、入間川などの河岸や、川原で採取したものと考えられます。

では採取した石材はどのように利用されたのでしょう。

そのまま使う

縄文時代の遺跡は様々な遺構から構成されていますが、この遺構の中には、石を使って作られたものもあります。写真１は竪穴式住居の床面に石を敷き詰めたもので敷石住居跡と呼んでいます。石材は平らな面が上を向くように置かれ、石と石の隙間にはより小さな石を詰めた強固な造りになっています。写真２は竪穴式住居の炉跡です。縄文時代の炉にはいくつかバリエーションがあり、写真の炉跡は土器と石を併用したものですが、石だけ使う、土器だけ使う、どちらも使わないものがあり、石や土器の用い方にも違いがあったりします。写真３はお墓の跡で、配石墓と呼びます。楕円形に掘られた土坑の壁面に沿って石が組まれ、一方の先端が細く尖る船のような形になっています。写真４は調理施設の跡で、集石土坑と呼びます。土坑に石を詰め、熱して蒸し焼きなどの調理を行った跡と考えられています。詰められた石は強く熱を受け、赤く変色し、バラバラに割れています。上述した３種類の遺構と比べると、集石土坑の石は小さく、ややチャートが多めです。

しかし、これらの遺構に用いられている石材は、大きさや形が重視されていたようですが、チャートだけでなく、同様に採取できる砂岩なども使われ、その比率からは石の種類に強い選択性は見出せません。

加工して使う

一方で、縄文時代には狩猟や加工などに用いる様々な道具が石を使って作られましたが、これら石製の道具、石器には、材料とする石の特性が重視され、各石器に適した素材が選ばれていました。

その中でチャートは主に、石鏃（矢じり）、石槍、石匙（つまみのついたナイフのようなもの）、石錐（穴を開ける道具、きり）、掻器・削器（皮や木・骨などを加工する道具）に用いられます。それぞれ用途の異なる石器ですが、共通する点として鋭い刃が付いていることが挙げられ、このような石器には、他に黒曜石などが選ばれます。チャートや黒曜石に共通する特徴としては、硬く、緻密で、打ち割った際に鋭利な剥片が得やすいことが挙げられます。また、石鏃などは大きさ２～３cm 程度ですが、その形を作るために行う調整は、数㎜単位の細かさです。鹿の角の先端を用いて、薄く剥ぐように加工していく、押圧剥離と呼ばれる技法なのですが、この加工に適した石材であることが重要でした。

写真５は小岩井渡場遺跡から出土したチャート製の石器と石器の素材となる剥片や製作時に生じた剥片です。チャートを用いて遺跡内で石器を制作していた証拠となります。また、チャートの特徴として、黒～灰色、白色、青灰色、赤色など、色調が豊かなことが分かります。写真６は市内で採集されたチャート製の石器で、最下部の石器は「異形石器」と呼ばれるものです。用途は不明ですが、実用的な道具というよりは、装飾品あるいは儀礼的な品で、その形そのものに意味を持っていたとも言われています。写真の石器は、赤色のチャートを意識的に用いているように思えます。チャートを多く使っていた飯能の縄文人の道具箱は意外とカラフルだったのかもしれません。

クロモジ

エゴノキ（実）

コウヤボウキ（種）

ゲンノショウコ

タケニグサ

葉がつくよりも先にたくさんの黄色い花を垂れ下げて咲かせます。果実はタンニンを含んでいて、お歯黒として使われました。お歯黒とは、歯を黒く染める風習で、結婚した女性が行っていました。お歯黒に用いるタンニンの一種は、市販品もありましたが、農山村では家の近くで採れる植物も用いられていました。

春に花が咲くクロモジは、若い枝が緑色で、古い枝ほど黒い斑点が入ります。枝葉からはよい香りがします。この枝から楊枝が作られます。今でも菓子を買うと、クロモジの楊枝をつけてくれる和菓子屋もあります。

エゴノキは、5～6月頃に白色の花を下向きに咲かせ、7月頃になるとくすんだ白色の果実をつけます。この果実は、昔、石けんの代わりに使われていました。果実には、サポニンという物質が含まれていて、水に入れて攪拌（かくはん）すると泡が出ます。小さなペットボトルに水と果実を入れてしばらく振ってみるとわかりやすいでしょう。ただし、毒性があるため、試した後は周囲にそのまま流さず、きちんと持ち帰りましょう。

コウヤボウキは、早いものでは8月下旬から咲き始め、12月頃まで白色の花を咲かせます。その後、白くてふわふわした綿毛をつけ、なんとも可愛らしい様子です。この枝が高野山でホウキとして使われていたことから、コウヤボウキと呼ばれました。天覧山・多峯主山の至る所で見ることができます。

植物の中には、民間薬として用いられたものもありました。例えばゲンノショウコです。主に下痢止め薬として用いられ、服用するとたちまち効き目が現れることから「現の証拠」という名がついたと言われています。しかし、ゲンノショウコと間違えて、似ているウマノアシガタやトリカブトなどの毒を含む植物を誤食する方がいたそうですので、試さないようにしましょう。タケニグサなど植物に含まれる毒性を利用し、害虫駆除に用いられる植物もありました。

他にも春の七草であるハコベの仲間、神事で用いられるヒサカキなど、多くの有用植物に出会うことができます。そして、どの植物も季節とともに訪れる方々を色や形、香りなどで楽しませてくれます。現在では、有用植物としてなかなか用いられなくなった植物もありますが、植物は今でも変わらず私たちの身近にあって、生活に寄り添っています。ぜひ、散策をして、植物との出会いを楽しんでください。

はんのう お宝スポット
HANNO Treasure Spot Information.
Vol. 15
発行：飯能市教育委員会生涯学習スポーツ部生涯学習課（文化財担当）　〒357-8501　飯能市双柳 1-1　Tel (042)973-2111
第 15 号　令和2年 3 月 31 日発行　平成 18 年 3 月 31 日創刊

「植物を利用する」視点で飯能を知ろう！

●第 15 号の特集は「植物利用」です。

身近に生えている植物を私たちは様々な方法で利用し、生活しています。例えば、食料・道具・材料・燃料など身の回りには植物そのものだけでなく、植物を利用したものがたくさんあります。

今回は、縄文時代の植物利用と現在の身近に見られる植物利用に焦点をあてて特集しました。どのように人々が植物を利用してきたのか、そこから見える人々の知恵を是非感じて、自然と共生する大切さを考えてみて下さい。

縄文時代の植物利用

飯能市教育委員会生涯学習スポーツ部生涯学習課　専門調査員　大野朝日

はじめに

現代に生きる私たちと同様に、縄文時代の人々も植物を様々に利用して生活していました。

しかし、縄文時代の遺跡から、当時の人々が食べた木の実や、家を建てた木の柱などが発見されることは、とても稀です。木材や骨など、生き物の体がもとになった物質は、長い年月の間に酸性の土壌に腐食されたり、細菌や小さな生き物たちの働きによって土へ還ってしまったりして、現在まで形を残すことが難しいからです。

ただ、植物そのものが見つからなくとも、飯能に住んでいた縄文時代の人々が、どのように植物を利用していたのかを推測できる資料はあります。

飯能市の遺跡で見つかった様々な考古資料から、縄文時代の植物利用の一端をご紹介します。

縄文の編み物

昨年末、飯能市では初めての事例となる貴重な資料が加能里遺跡第 90 次調査地点 (岩沢) で見つかりました (図1)。よく見ると、節のある植物を縦に割ったようなものが、直行する向きで組まれている様子がわかります。

図 1

縄文時代晩期の人々が、ササ類を材料にして作った編み物の一部が、焼けて炭になったものであると思われます。編み物全体の様子はわかりませんが、住居の縁の床近くから見つかったので、家の床に敷いていた「ござ」だと考えられます。焼け崩れた家の下敷きになるなどして、そのままの形が炭となって残ったものでしょう。

このような縄文時代の編み物については、低湿地に位置する遺跡を中心に、植物の割り材などを材料として多

くの技法が使い分けられた資料が全国で見つかっており、当時の人々にとって身近な道具だったことがわかってきました。

その様子は、縄文土器の底についた痕からもわかることがあります。図2・図3は、加能里遺跡の第43次調査地点（岩沢）で見つかった縄文時代晩期のものと思われる土器の底の部分です。図2の土器底に編み物の痕がついているのがわかります。粘土をこねて土器を作る際、取り回しがし易いように、編み物を下敷きとして使っていたのでしょう。また、土器の下敷きには、編み物だけでなく、大きな葉っぱも使われていました（図3）。

図2

図3

管理・栽培された？植物

同じく加能里遺跡第43次調査地点では、「敷物圧痕」のある土器以外にも、ウルシの樹液がこびりついた土器も出土しています。漆は、土器の使用時には見えない、台部の内側についていました（図4）。この土器を装飾するために漆が塗られているわけではなく、この土器が壊れてしまった後に、漆を保管しておくための容器として、または漆を塗りつける際のパレットとして、再利用されたものでしょう。

ウルシは、現代でも利用されている馴染みのある植物ですが、日本列島には本来、野生のウルシは生えていません。縄文時代に日本列島へと持ち込まれてきた植物だと考えられています。

図4

近年では、縄文時代の植物利用の研究がすすみ、縄文時代の人々が、植物を育てたり、手をかけて管理していたということも明らかになりつつあります。ウルシのように野生では日本列島に存在していない植物や、栽培に適した種類の植物が遺跡から見つかることは、縄文時代の植物利用を考えるうえでとても貴重な資料です。

別の例として、土器に偶然できた割れ口から炭化したマメ類植物の種子が顔をみせている資料が、別所平遺跡第2次調査地点（大河原）で見つかりました（図5）。この土器に似た事例は、北本市のデーノタメ遺跡でも見つかっています。デーノタメ遺跡の事例では、土器に残ったマメの粒の痕「種子圧痕」の大きさが野生のマメに比べて大型であることから、人が育て「栽培化」したマメであった可能性が考えられています。土器の胎土に意図的に練り込まれたものか、偶然に混ざり込んでしまったのかは定かではありませんが、別所平遺跡で見つかったマメも、この土器を作った人の身の回りで栽培されていたものかもしれません。

図5

おわりに

縄文時代の植物利用というテーマは、直接的な資料こそ多くありませんが、縄文時代の衣食住に密接に関係する重要なものです。当時の人々にとっても、飯能の木々や緑は「お宝」だったことでしょう。私たちが日々の生活で触れたり、目にしたりする植物と同じものを、数千年前の飯能人も見ていたかもしれません。

飯能市は植物の宝庫（Ⅶ）
―飯能の植生と身近で見られる有用植物―

飯能市立博物館 学芸員
長谷川裕子

『はんのうお宝スポット』では、これまで6回に渡って、飯能市の宝である植物について紹介してきました。飯能市の自然林、二次林、特徴的な植物を紹介し、その後、市内に自生している植物を3回連載として紹介しました。今回は、飯能市の植生と天覧山・多峯主山で見られる一般的な有用植物を紹介します。

1. 飯能市の植生

地表をおおう植物の広がりを植生、といいます。植生を決める重要な要因は、気温と降水量そして土壌です。日本は降水量が多いので、最終的には森林植生になります。年平均気温の差から、日本列島の森林帯を亜熱帯、暖温帯、冷温帯、亜寒帯に分けることができます。飯能市はそのほとんどが暖温帯に属していますが、冷温帯植生も見られます。植物の移り変わりのことを遷移といい、その最終段階の森林のことを極相林といいます。暖温帯の極相林では、スダジイやタブノキ、アラカシ、シラカシといったカシの仲間などの照葉樹が優占します。例えば、吾野地区では、大山祇（おおやまつみ）神社の社寺林としてウラジロガシ林が見られます。暖温帯の照葉樹林が、飯能市のような内陸部にあるのは珍しく、貴重であることから埼玉県の天然記念物になっています。冷温帯樹林としては、入間川水源がある名栗地区ウノタワのブナ林や、渓流沿いにあるサワグルミ林が見られます。また吾野地区の刈場峠付近ではミズナラ林があります。

土壌や岩石によって特徴的な植生が見られることもあります。名栗地区の白岩や蝉指には石灰岩地があり、そのような場所を好む植物が見られます。キンモウワラビ、ミヤマウラジロやヤハズハハコなどが岩壁に生育しています。人が手を加えたことで、遷移が途中で止まり、二次林であるコナラやクヌギなどの落葉樹林が維持されている場所もあります。加治地区にはコナラやクヌギの雑木林が残り、カタクリ・イカリソウの群落が見られます。この群落は、飯能市の天然記念物になっています。

そして地形の特徴として、飯能市は関東山地と関東平野にまたがって位置しています。また、入間川や高麗川などが流れ、飯能台地が広がるなど様々な環境があることが、飯能市の植生に影響しています。埼玉県では、種子植物とシダ植物を合わせて約2,900種の植物が確認されており、そのうち飯能市では約1,600種が確認されています。飯能市は埼玉県の5%程度の面積しか占めていないのにも関わらず、県内で見られる約55%の植物が生息しているのです。このことから飯能市は、埼玉県において「植物の宝庫」といえるのではないでしょうか。

2　天覧山・多峯主山で見られる有用植物

飯能市の観光シンボルともいわれる天覧山・多峯主山は、昔から人々が雑木林や畑、田んぼとして利用してきました。このような二次的自然は「里山」と呼ばれます。里山では、林の中やその縁、沢と湿地、草原に水田など、自然遷移と人の働きかけによって様々な環境が生まれ、多くの植物が見られます。

雑木林では、コナラやクヌギなどを薪炭として利用していました。このような落葉樹は、冬になると枯れ葉を落とすので、農閑期には「落ち葉掃き（くずはき）」を行いました。集めた落ち葉は、竹やわらで囲った場所に貯め置き、ミミズや微生物などの働きによって分解され、やがて堆肥になりました。このような雑木林がある里山では、有用植物として使われていた植物が多くありますので、いくつか紹介しましょう。

春一番に咲く樹木の一つに、キブシがあります。早春、

落ち葉掃き（くずはき）の様子

キブシ

【写真⑤】出土した土器についたコゲ

れた道具が縄文土器なのです。

突然ですが、縄文土器の８割以上が「ナベ」だということを知っていますか？遺跡から見つかる土器の大半を占める「深鉢形土器」と呼んでいる形の土器が「ナベ」なのです。この器種の出土量を見ると、縄文人がいかに多くのナベを必要としていたのかがわかります。それだけたくさんのドングリのアクを抜き、それを食べていたことが推測できます。

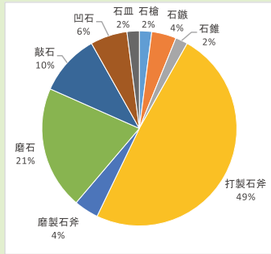
5. 磨り潰す

取り出した中身は別の道具で粉状に加工します。縄文時代の製粉具は“石皿”と“磨石”です。この道具はセットで使用します。ドングリの中身を石皿の凹みにのせ、磨石を使って磨り潰していきます。現代の道具でいうと、擂り鉢（すりばち）と擂粉木（すりこぎ）にあたります。石皿の形は、各時期によって少し変化しますが、中期（5,500年前）には平べったい石に大きい凹みをつけたもの（写真⑦右）が、晩期（3,000年前）には深みのある土手を持つ形状のもの（写真⑦左）が見られます。写真⑦中央の凹みがたくさんある石は凹石で、別名「蜂の巣石」とも呼ばれます。いずれも市内の遺跡からの出土品です。

【写真⑥】石皿を使った製粉の様子

【写真⑦】市内から出土した製粉具

縄文時代中期以降の遺跡を調査すると沢山の石器が出土します。グラフ１は、横道下遺跡の住居跡１軒から出土した器種別の出土量です。この内、植物食に関係する石器は全体の９割弱にもなります。今回触れていませんが、一番多い打製石斧は山芋等を掘るための土掘り具です。磨石・石皿・敲石は前述したドングリ加工の道具です。石器の出土割合を見ても植物食に関係する道具が多く、盛んに植物が採集・加工され、食べられていたことがうかがえます。



【グラフ1】石器の器種別出土量（横道下遺跡）

6. ドングリを保存する

ドングリは秋になると次々に実ります。恐らく縄文人はどの時期にどこのドングリが取れるか熟知していて、村人総出で採集に行ったと思います。網カゴに一杯のドングリをムラに集めて保存します。保存には、貯蔵穴と呼んでいる穴を地面に掘り、そこを利用していました。写真⑧は加能里遺跡で見つかった貯蔵穴で、直径1.7ｍ、深さ１ｍ弱の大型のものです。他県の事例では、その中にドングリと木の葉を交互に積み重ねたものも見つかっています。湿気を防ぐ工夫だと考えられています。市内では遺跡の数に比べ貯蔵穴の検出例が少なく、他の方法でも貯蔵していた可能性がありますが、よくわかっていません。

【写真⑧】加能里遺跡の貯蔵穴

縄文人にとって獣や魚等は毎日必ず手に入る食べ物ではありません。ドングリは保存がきくため、日々の食料として欠かせないものであったのでしょう。

現代の日本人が忘れてしまった身近な所に自生する四季折々の食べられる植物。縄文人はそれらを熟知し、工夫を重ねて生活していました。自然に寄り添った縄文人の生活から、現代人が今学ぶべき事がたくさんあるとは思いませんか。

※1 米田穣2013「同位体生態学で見た縄文時代人と現代人」『化学と教育』61巻7　日本化学会

はんのう お宝スポット
HANNO Treasure Spot Information.
Vol. 16
発行：飯能市教育委員会生涯学習スポーツ部生涯学習課（文化財担当）　〒357-8501　飯能市双柳 1-1　Tel (042)973-2111
第 16 号　令和3年３月 31 日発行　平成 18 年３月 31 日創刊

「植物利用」から飯能の森林文化について考えよう！

●第 16 号の特集は前号につづき「植物利用」

飯能市は、自然と都市機能とが調和するまちの創造をめざし、平成 17 年４月に「森林文化都市」を宣言しました。新たな森林文化をわたしたちが創造していくためには、森林とともに先人がはぐくんできた生活文化を詳しく知る必要があります。

今号では、かつて山間部でさかんに行われていた炭焼きや縄文時代の木の実の利用を紹介します。飯能にくらした人々が森林のめぐみをどのように利用して生活していたかを考えてみましょう。

「森林文化の遺産」としての炭 ～『鬼滅の刃』を例に～

飯能市立博物館 学芸員　引間隆文

1. はじめに

新型コロナウイルスにより歴史に特記されるであろう令和２年に空前のヒットとなったのが『鬼滅の刃』（以下、『鬼滅』）です。吾峠呼世晴（ごとうげこよはる）氏が描いた漫画である『鬼滅』は、アニメや映画にもなり、社会現象とも言えるほどのブームを巻き起こしました。

『鬼滅』は、民俗的な色彩が濃い作品ではないかと思います（何でも民俗と結びつけたがる民俗担当学芸員の哀しい性かもしれませんが…）。例えば、鬼の討伐は「桃太郎」や「大江山（おおえやま）の酒呑童子（しゅてんどうじ）」のように昔話でお馴染（なじ）みのストーリーです（強引でしょうか…）。そんな「民俗屋」が『鬼滅』を読んで気になったのが、作中に登場する「炭」なのです。

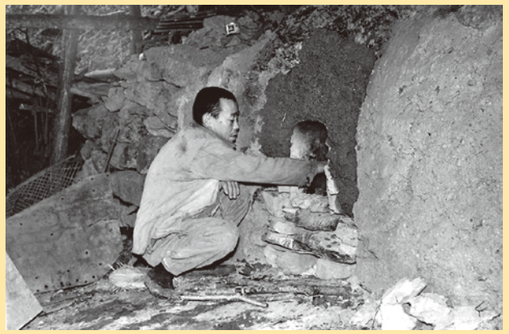
本稿では『鬼滅』に描かれた炭（木炭）を例に、飯能市域（特に名栗地区）の炭について記したいと思います。

2. 飯能と炭

炭は、木を蒸し焼きにして炭化させた燃料のことです。炭素が主であることから、薪（まき）に比べて煙も臭いもほとんど出ず、火持ちも良いなど優れた燃料です。かつては薪と共に燃料として広く用いられており、炊事や暖房など人々の生活に必要不可欠でした。

炭を作る作業や人のことを「炭焼き」と言い、かつての山村では主要な産業の一つでした。本市域の約８割を占める山間地域でも、炭焼きは盛んに行われていました。

以前、筆者が行った聞き書きでは「昔の山は、秋になるときれいだった」という思い出話をよく聞きました。今でこそ西川材の産地としてスギやヒノキが茂り、年間を通して「緑色」という風景が当たり前になっていますが、この風景は戦後の植林活動の結果生じたものです。それ以前は、薪炭用としての落葉広葉樹も多かったため、秋になると紅葉し山は美しく彩られていたのです。



炭焼き　　島田稔氏所蔵

山の景色が異なるほど盛んに行われていた炭焼きですが、昭和30年代になるとガスなどの普及により薪炭の需要が落ちたため、徐々に廃れていきました。

3.『鬼滅の刃』の炭　～飯能の事例から～

かつて山村に生きた多くの人々が携わった炭焼き。『鬼滅』の主人公・竈門炭治郎少年の家も炭焼きを生業としていました。『鬼滅』第1話は、炭治郎が麓の町に炭を売りに行くところから始まります。この場面で炭治郎は、背負いかごに炭をそのまま詰めて山を下りていますが、これは考えにくいことです。かつて炭を出荷する際は、炭俵に入れて運んでいました。炭はもろく、そのまま背負いかごに入れて運んだのでは粉々となってしまいます。これでは当地で「クズッツミ」(屑炭) と呼ばれていた等外品となり、最悪の場合、売り物にならなくなってしまうのです。

では『鬼滅』の炭に関する描写が間違いばかりかと言うと、そんなことはありません。むしろ、作者の吾峠氏は、炭焼きについてしっかりと調べているのではないかとすら感じさせられます。

例えば、先述の炭の運搬ですが、炭をそのまま背負いかごに入れて運搬することはまずありません。しかし、「少年」が炭を「背負って運ぶ」ということは、当地でも盛んに行われていました。

炭を山中から運び出すことを当地では「ショイダシ」と呼んでいました。ショイダシは、成人男性はもちろん女性や子どもも従事していました。炭俵は、1俵が約15kgありますが、男性なら3俵、女性でも2俵を運ぶのが一人前とされていました。子どもなら1俵ですが、それでも15kgです。かなりの重労働ですが、老若男女を問わず森林と関わって生活してきた事の表れとも言えます。『鬼滅』第1話の炭に関する描写は、飯能の話ではないものの、飯能も含め森林の恵みを享受して生きていたかつての人々の暮らしがしっかりと描かれています。

炭のショイダシ（搬出）　島田稔氏所蔵

もう一つの事例は、炭治郎の嗅覚についてです。炭治郎は鼻がきく設定となっており、窮地をこの鋭い嗅覚により乗り越えたこともあります。実は、この優れた嗅覚こそ一人前の炭焼きには欠かせない感覚なのです。

炭焼きは、経験と鍛え上げた感覚によって支えられていました。炭焼き窯の中を直接見る術はなく、中の状況を知るには、窯から立ち上る煙の色や漂う臭いだけが頼りでした。特に、刻々と変化する臭いは、焼け具合を判断する決め手であり、名人と称される炭焼きは、常人離れした鋭い嗅覚を有することが多々あったと言われています。名栗地区のある名人は、臭いだけで自分と他人の窯を区別することができたそうですし、麓の家で寝ながら山中の窯の臭いを感じとり焼け具合を判断できたのだそうです。にわかには信じがたい話ですが、煙の臭いを頭の中に叩き込んで初めて一人前とされる炭焼きの世界を極めた名人にとっては、当たり前の身体能力だったのかもしれません。きっと炭治郎も、後には炭焼き名人と称されたことでしょう。

4. おわりに

竈門家が炭焼きで生計を立てていたように、飯能の山間地域でも多くの人々が炭焼きを生業としていました。成人男性のみならず、女性や子どもも搬出や俵編みなど様々な工程に関わり、炭という森林の恵みを、老若男女を問わず皆で享受しながら暮らしを営んできました。そう考えると炭は、森林の恵みを受けながら発展してきた飯能の「森林文化の遺産」の一つでもあるのではないでしょうか（筆者は、図らずも『鬼滅』という漫画により、そのことを再認識させられました。地域の歴史・文化遺産への入口として、漫画などサブカルチャーの積極的な活用が望まれます）。

先人たちが育んだ高度な技術に裏打ちされた植物利用の結晶である炭が、飯能の「森林文化の遺産」として広く再認識されることを願ってやみません。

【参考文献】
飯能市教育委員会 2008『名栗の民俗・下』
飯能市郷土館 2018『飯能市立博物館展示ガイドブック』

縄文時代の植物食　―ドングリを食べる―

生涯学習課文化財担当　熊澤孝之

1. はじめに

縄文時代は、今から約14,000年前に始まり、約2,300年前に終わりをむかえた、狩猟と採集を糧に生活していた時代といわれています。多くの方は縄文時代のイメージを、貧しい困窮した生活を送っていた時代と考えているかもしれませんが、近年の研究では、狩猟と採集を主とした時代でありながら、自然と密着し、自然の恵みを受けながら豊かな生活を送っていたと考えられるようになっています。

では、具体的にどのような生活を送っていたのか、植物食を視点に考えていきたいと思います。

2. 植物食（ドングリ）

近年、研究の進展により、縄文人の人骨を科学的に分析した結果※1、生きていた時にどのようなものを食べていたのかが大まかですが解ってきました。

北海道の一部では、海獣（アザラシなど）を摂取した率が高い集団が認められましたが、それ以外の大半の地域では、木の実を主食とした植物食が主体であるとの結果が出ています。

それでは、多くの縄文人が主食としていた木の実等の植物食とはどのようなものなのでしょうか。

木の実の中でも皆さんに馴染み深いものは「ドングリ」の仲間ではないでしょうか。クヌギ、カシ、シイ、コナラ、ブナなどが身近なドングリとして思いつくものでしょう。ほかにクリ、クルミ、トチなども食用の木の実です。これら木の実の中で、今でも皆さんが良く食べる実は何でしょうか。クリやクルミを食べているのではないでしょうか。これらの実は苦味がなくそのまま食べることができます。実は縄文人もクリやクルミは大好きでした。現在の飯能市でも天覧山・多峯主山等の里山にはコナラ、クヌギ、シイなど木の実の実る木が、阿須の河川敷や成木川の川沿いにはクルミやトチといった水際を好む木が自生しています。

【写真①】入間川沿いに自生するクルミ

身近なドングリを縄文人はどのように加工し、食べていたのか、その過程を考えていきたいと思います。

3. 殻を割る

【写真②】クルミの殻を割る

ドングリの実は固い殻に包まれています。この殻を割るときの道具が“凹石”と“敲石”です。ドングリを凹石の凹みに立て、上から敲石でたたいて殻を割ります。特に殻が固いクルミを試しに割ってみましょう。

写真②のように凹みにクルミがすっぽり収まります。敲いたときにクルミが飛んでいってしまうことはありません。敲石で敲くときれいに割ることが出来ます。遺跡から出土する凹石の凹みをよく観察すると、クルミの尖った方を凹みに合わせていることがわかります。単純に凹みに置くのではなく、どの向きにセットすれば割り易いのか、経験的に考えられた道具であると言えます。

苦味の無い実はこの段階で食べることが出来ますが、苦味のあるクヌギやコナラなどは、苦味を抜く必要があります。

4. 苦味（アク）を抜く

ドングリの多くは水で晒したり、煮だすことでアクを抜いています。縄文時代で一番知られている道具である「縄文土器」も実は植物食に欠かせない道具です。実験でドングリを煮た土器の内側を良く見ると、煮た物が少し付着していることがわかります。

【写真③】ドングリのアク抜き（煮沸）

写真⑤の土器は、岩沢の加能里遺跡から出土した土器です。土器の内側に炭化した付着物を確認することが出来ます。このことからも、土器は煮沸用具であったことがわかります。つまり、ドングリのアクを抜くのにも使わ

【写真④】土器の内側についたコゲ

はなく農村までこうした焼き物が広まっていたことを示しています。

そうした中で、飯能焼の製品は、江戸・江戸近郊(現在の東京23区)の遺跡からの出土が多く報告されています。武蔵国の外れにある小さな窯にも関わらず、どうして製品を江戸に売り出すことができたのでしょうか？　現代風に言うと、大手企業がシェアを独占している業界に、どのようにくさびを打ち込んでいったのでしょうか。発掘調査でわかったことの中にそのヒントが隠れているようです。

戦略①　イメージブランド戦略！

他にはない特徴あるデザインに統一して、「飯能焼」の名を広めよう！

戦略②　隙間を狙え！

他産地の得意分野は避けて、独自の文様やセンスで「飯能焼」を印象づけよう！

戦略③　自分を知り、かつ流行に乗れ！

飯能焼の粘土の特徴を活かして、当時流行し始めた“小鍋立て”用の鍋を大量生産して、経営基盤を安定させよう！

戦略④　ターゲットは江戸だ！

人口が多く小料理屋や宿屋も多い江戸向きの食器を売り出そう！

原窯では、何をつくりどのように売るかといった市場リサーチを事前に行っていたと思われます。

4．飯能焼という産業を企画したのは誰？

飯能焼の原窯を直接経営していたのは、『土瓶屋』という屋号の八右衛門という人であることがわかっています。当時の住民票にあたる「宗門人別帳」によると、八右衛門は1852年以降、陶工や絵師などの身元引請人になっています。また、発掘調査でも『八　土瓶屋』という焼き物印(図４)が出土しているので、窯元であったことは確かでしょう。

疑問１　八右衛門は、わかっているだけでも陶工や絵師６人の引請人となっています。これらの職人は信楽や美濃などいろいろな場所から呼ばれてきています。八右衛門ひとりの力でこのような経営規模の拡大がおこなえたのでしょうか。

疑問２　図３は化粧品(髪油)の入れ物で、商品名のほかに「すみよし町」「まつもと」という、日本橋、住吉町にあった歌舞伎役者松本幸四郎のお店の名前が入っています。このような注文生産の仕事を誰が取り付けてきたのでしょうか。

図３　化粧品容器(第３～５次調査出土)

5．飯能町の商人

そこで浮かび上がってくるのが、金子清吉(双木清吉)という人物です。1830又は1842年の干支年号をもつ墨書土器に「金子清吉」の名前が見られ(図４)、また初期の片手鍋の握手に「子」の型印が使用されていること、土瓶屋八右衛門や二代目新平の家主であることなど、操業初期の原窯に関わっていたと思われますが、どのような役割を果たしたのかは、よくわかっていません。

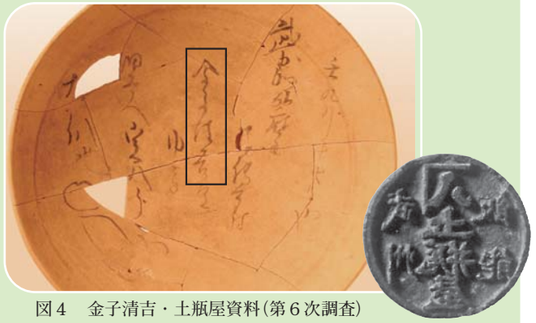


図４　金子清吉・土瓶屋資料(第６次調査)

金子清吉は、はじめ飯能町の薬種問屋金子忠五郎家に奉公し、のちに独立しています。金子忠五郎家は、飯能縄市を構成する久下分村の名主を務め、その後、武蔵野鉄道(現在の西武鉄道)設立に尽力したことからわかるように飯能町有数の商家です。

飯能の町は、“西川材”の江戸への流通でわかるように江戸地廻り経済圏に入っていました。窯が真能寺村名主の双木利八郎家の隣地に開かれていることなど、土瓶屋八右衛門の原窯経営には、飯能町の旦那衆の関与が見え隠れしているようです。

『飯能の遺跡（27）(34)(35)』(1999・2006・2007）飯能市教育委員会
『掘り起こせ！地中からのメッセージ』（2010）飯能市教育委員会
『飯能焼原窯の研究（１）』『飯能市郷土館研究紀要』第４号（2008）

はんのうお宝スポット
HANNO Treasure Spot Information.
Vol. 17
発行：飯能市教育委員会生涯学習スポーツ部生涯学習課（文化財担当）〒357-8501　飯能市双柳1-1　Tel(042)973-2111
第17号　令和４年３月31日発行　平成18年３月31日創刊

今号から新たな特集シリーズが始まります！

●第17号は２本立てです

前号まで２号にわたり「植物利用」を特集してきましたが、今号では飯能の歴史や文化を語る上で欠かせない「仏像」と「飯能焼」についてご紹介します。なお、仏像については全３回のシリーズを予定しており、今号はその入門編とも言える内容になります。

ぜひ記事を通して、人びとの祈りやかつての飯能を盛り上げた産業に思いを馳せてみてください。

飯能の仏像　①仏像の楽しみ方・仏像の種類

飯能市文化財保護審議会委員
林　宏一

このお正月、近くの寺社に初詣、さらには足を延ばして「七福神めぐり」に行かれた方も多いと思います。ご承知のように七福神は恵比寿、大黒天、毘沙門天、弁財天、福禄寿、寿老人、布袋の七人の福神を云いますが、このうち仏教に由来する福神は大黒天、毘沙門天、弁財天、布袋の四神となります。布袋は、中国唐代末に実在したという伝説的な僧で、大きな袋を背負い太鼓腹の特徴ある姿で数々の不思議を現し、のちに弥勒の化身として人々に尊ばれ、わが国では江戸時代も後半頃に七福神の列に加えられた方です。この他の大黒天、毘沙門天、弁財天は、インド在来の神々に起源を持つ仏教の護法神で、尊名の最後に「天」が付くように、如来・菩薩・明王・天部と分けられる仏像の世界の「天部」に属し、各々の得意な験力による除災増福開運延寿に御利益ある福神として親しまれています。天部には、他に帝釈天、吉祥天、歓喜天、鬼子母神や仁王尊など庶民に人気のある尊像が多くあり、現世利益を求める人々の願いに応えています。

さてこうした異教の神々に出自を持つ天部諸尊に支えられて仏教世界のトップに立つ方が「如来」です。如来は、厳しい修行を経て真如の理を証得(悟り)し、煩悩に迷う衆生を済度するためにこの世に現れた方で、覚者の意味をもつ「仏陀」・「仏」とも呼ばれています。ＢＣ５Ｃ頃初めて仏法を説いた現世仏である釈迦をはじめ、釈迦滅後多くの弟子や後継者達によって、より広くよりわかりやすく衆生の心を平安に導くために創案された阿弥陀、

阿弥陀如来と脇侍（旧西光寺）

薬師、弥勒等の諸尊、さらには密教思想の登場に伴い、広大な宇宙に光明遍照し生きとし生けるものの仏性を覚醒させる大日如来(毘盧遮那仏)等が存在しています。永い修行を経て悟りの世界に達した如来は、密教系の尊像を除き、蓬髪(螺髪)・弊衣(衲衣)の修行者のような姿で表されています。

これらの如来を補佐して衆生の仏道成就を援ける方々が「菩薩」です。観音、地蔵、虚空蔵、文殊、普賢、勢至等我々にとっては最も身近に居て、正しい祈りの道筋を教えてくれています。菩薩は、既に悟りの境地に達せられていますが、衆生済度にさらなる実践を重ねて如来の資格を得ようとされている、いわば医学生のインターンのような立場の方と云えましょう。その姿はインドの王侯貴族をモデルに、高く華やかな髻を結い、上等な薄物の衣装をまとって、煌びやかな宝石を連ねた目にもまばゆい装身具で身を飾っています。

聖観音(長念寺)

一方、不動明王に代表される「明王」は密教独特の尊像です。古代インドで7・8C頃成立した密教は、大日如来を絶対の教主におき、それ以前の仏教(顕教)の諸尊を曼荼羅世界に包摂した深遠秘密の教えと行を説く新しい仏教思潮で、唐代に中国で漢訳整備され、わが国には9C初めに空海により真言密教として伝えられました。明王は大日如来の化身として仏法に敵する魔障を撃破する強い力を持つことから、忿怒形・多面多臂・多目多脚など異形の姿で表されます。赤や黒・青等の原色の肌を持ち、不思議な手印を結び、髑髏や蛇・獣皮などを身にまとうなど怪奇変幻の姿は拝する者に畏怖の念をうえ付けずにはおきません。その多くはヒンドゥー教の神々に由来するものが多く、短身肥満、童子のような体型をもつ尊像がめだちます。

以上、仏教では仏像の種類を大きく如来・菩薩・明王・天部の四つに分けていることが御理解いただけたでしょう。それぞれの姿は、経典や儀軌によって細かく定められています。詳しく学びたい方は、関連の書籍が図書館や書店に沢山列んでいるので手に取ってみて下さい。

今ひとつ、よいことをお教えしましょう。参拝に訪れるお寺の山号や名称で、その寺の本尊さまがおおよそ分かることです。如来にはそれぞれ常住されている国、すなわち浄土があります。釈迦は霊鷲山浄土、阿弥陀は西方極樂浄土、薬師は東方瑠璃光浄土、弥勒は北方兜率天浄土、それに菩薩になりますが、観音は南方補陀洛浄土であることは御存じの方も多いと思います。山号や寺名にこれら諸尊の浄土や方角の文字が入っていれば、その寺の本尊さまがほぼ類推できるでしょう。山号が霊鷲山であれば御本尊はお釈迦さま、寺名が西方寺や極楽寺であれば阿弥陀さま、東国寺・瑠璃光寺であれば薬師さまと云うように。

不動明王(常楽院)

また、その寺の宗派から御本尊さまを知ることも出来ます。それぞれの宗派によって礼拝する仏像がほぼ決まっているからです。真言宗なら不動さまか大日さま、天台宗なら薬師さまや観音さま、浄土宗や真宗・時宗なら阿弥陀さま、日蓮宗なら釈迦・多宝仏、禅宗ならお釈迦さまと云ったように。

いかがでしょう。飯能市内に沢山のお寺やお堂が在り、そこに古くから信仰され護り伝えられてきた多くの仏像が祀られています。市の教育委員会によるこれまでの丹念な調査によって、ようやくその全容が明らかになってきました。次回以降は、そうした飯能の仏像の魅力をさまざまな角度から探ってみましょう。

(林　宏一)

飯能焼(はんのうやき)と飯能焼原窯跡(はらがまあと)　ー幕末のベンチャー企業の挑戦ー

生涯学習課 文化財専門調査員
富元久美子

1.「飯能焼」・「飯能焼原窯」とは？

陶磁器の名前は、通常“有田焼” 瀬戸焼”のように、つくられた地域や地方の名前で呼ばれます。

江戸時代の末、飯能で陶器の焼き物がつくられていたことは、昭和の時代になっても飯能の人々の記憶に新しく、様々な伝承が残り、聞き取り調査も行われてきました。

明治21年(1887)に刷られた『大日本陶磁器窯元一覧』というちらしにも「飯能焼」という名称が記載されているので、全国的にもこの名前で知られていたことがわかります。

「飯能焼」を作っていた登り窯は、昭和初期まで八幡町(当時の地名は“原町”)に残っていました。ところが昭和50年代に、大字矢颪や東吾野でも江戸時代の窯跡が発見されたので、八幡町の窯を「飯能焼原窯跡」、新しく発見された窯を「矢颪窯跡」「白子窯跡」と呼んで区別することになりました。

ここでは「飯能焼原窯跡」を中心に、発掘調査によってわかってきた「飯能焼」とはどのようなものなのか、誰がつくったのか、何故飯能で焼き物をつくったのかと、いうことについてお話したいと思います。

2. 飯能焼原窯跡の発掘調査

これまで、飯能焼原窯跡では８回の発掘調査が行われています。

・発掘調査でわかったこと①

図１は、飯能焼の特徴をよくあらわしたもので、食卓の上にあがるような食器に繊細で優美な文様を描いています。文様は「イッチン描き」といって白粘土を絞り出して付けたものです。図１の他にも灯明皿、土瓶や皿など主に食器類を生産していますが、当時もっとも需要のあった「碗」(茶碗・湯呑)は作っていません。

釉(うわぐすり)も緑褐色に統一され、鉄釉(黒や赤色の釉)、染付・色絵など、他の技法を使った製品がほとんどなかったことも発掘調査で確認できました。思った以上にデザインを統一していたようです。

図１　発掘調査で出土した飯能焼
(飯能市郷土館特別図録「大地に刻まれた飯能の歴史」)より

・発掘調査でわかったこと②

これまで、旧家などに代々保存されていた「飯能焼」のうち最も多いのは“徳利”で、ひょうたん文様の徳利が「飯能焼」の代名詞といわれるほどでした。しかし、発掘調査の結果思いがけないことがわかりました。

第６次調査で出土した飯能焼の破片をすべて器種ごとに計量した結果、出土した約850kgのうち、なんと75％が片手鍋の破片だったのです。個体数に換算しても全体の60％以上にあたる量でした。

片手鍋とは１～２人分の小料理に使う小さい鍋で、図２のようにして調理し、そのまま食器として使うこともできました。飯能焼を作る粘土は、磁器のような白さをだすことができない代わり、耐火性に優れ、鍋や土瓶に適していました。

3. 飯能焼の戦略

江戸時代には、九州の有田、瀬戸・美濃、信楽・京都など、有名な産地の焼き物が全国に出回っていました。市内でも張摩久保遺跡等で肥前や瀬戸・美濃の陶磁器が多く出土しており、都市部だけで

図２　出土した片手鍋と七輪